

## 教育厚生委員会 県外調査活動状況

- 1 日 程 令和5年8月30日（水）～9月1日（金）
- 2 出席委員（8名）  
委員長 臼井 友基  
副委員長 中村 正仁  
委員 久保田松幸 宮本 秀憲 伊藤 毅 寺田 義彦  
古屋 雅夫 志村 直毅
- 3 欠席委員（1名）  
委員 菅野 幹子
- 4 調査概要（主な質疑答弁）

### （1）【富山県議会 女性の健康支援について】

問) 大変膨大な情報量で、これをすぐに施策に反映させるためにはどうしたらいいのか。頭の中で混乱が生まれている。種部先生がいるから富山県は進んでいると解釈したが、他県で展開する場合のアドバイスをいただけないか。

答) 今、話した内容をゆっくりかみ砕いていただければと思う。

地域に、こういうことをやってきた産婦人科医会がある。特に、山梨県には、素晴らしい方が教授で行かれたので、そうしたベクトルのある方たちと、一個一個やっていただきたい。「こういうのは具体的にどうか」と聞けば調べてくれると思う。ぜひ、そういう方と一緒にやっていただければと思う。

問) そのようにしていければよいと思う。

ちなみに、この施策の中で、特に早くやったほうがいいものに、優先順位をつけるとどのようになるか。

答) 令和6年度末までが公費接種で無料で打てる期限なので、まずはワクチンである。物理的に子宮を残せる人をふやしてあげることが一番いい。子宮頸がんのワクチンを3回打つと9万円くらいかかるので、令和6年度末を過ぎたらみんな打たないと思う。できればセクシャルデビューをする前に打ってもらいたいので、最優先課題は子宮頸がんのワクチンである。

問) 「若い子供たちはノーリスク」とおっしゃったが、その原因について、先生の意見を教えてください。

答) なかなか恋愛をしないという話である。小さいころから失敗することをとても恐れてきた、失敗しないで生きてきた世代である。昔は、けんかや失敗はいろいろな意味で何かクッション

ンのようなものがあるって、許されていた時代だったと思う。

例えば、子供同士でけんかをして、いろいろな、いざこざがある中で人間関係を学んでいく。ところが最近は、親が出てきて親同士のけんかになったりして、子供はけんかの場所を失っていき、修復することを学んでいない。それから、失敗したときに心を癒すことが必要だが、そうした失敗をする体験を積んでこなかった。親が近くで先回りして、リスクを負わせないようにしてきたところが大きいと思う。

高校生は「恋愛ってコスパが悪い」と言う。これをどうするかが少子化会議の鍵だと思う。

問) 先ほど、先生がおっしゃられた子宮内膜症のところ、ひいては卵巣がんなどにつながってくるという話であるが、いわゆる生理が始まってから、その辺の病気に対する、自治体などによる検査など、そういった仕組みづくりをしっかりとさせるには、どのようにしたらいいのか。あるいは、富山県でいい実例があれば教えていただきたい。

答) この年代には検診のチャンスが全くない。中学生ぐらいのときに月経痛があったら、まず、受診するというのが一つかなと思う。18歳まで医療費がカバーされていれば受診できるはずである。

生理のときに毎月保健室で寝ている子は、病院に行って診察してもらったほうがいい。養護の先生も「そこまでひどい人は一度婦人科に行きなさい」と指導している。でも、なぜ、婦人科に行かないかという、婦人科に行くと下半身の診察をされると思っている。そんなことはしない。性交経験のない子はお腹の中を超音波検査するだけで、これを徹底することでハードルを下げて「あの病院へ行ったら診察してくれるよ」という受診するための仕組みや仕掛けができるといい。

ぜひ、山梨県にいるすばらしい先生方と取り組んでいただくといいと思う。

問) 子宮頸がんワクチンのことであるが、男性と女性の性交渉というところで、男性に対するワクチンの効果に関して、喉頭がんなども含めてどのような現状か教えてほしい。

答) 今、全国で8市町村だったと思うが、男性の接種に対して補助を出している。アメリカやオーストラリアなどの海外では、男子も女子も9価ワクチンの2回接種が標準スケジュールである。しばらくキャッチアップ接種を実施していたが、今は定期接種と言われる世代で男子も女子もやっている。

日本もそうするつもりで考えていると思うが、その前にやらなければならないことは、男子に9価ワクチンの承認を取ることである。今、男子は4価ワクチンだけが承認されている。できれば9価ワクチンも承認されて、今回、女子は14歳以下2回になったので、14歳以下の男子が9価ワクチンを2回となれば、国は、おそらく公費でやるつもりでいると思う。来年の国の概算要求の中に書いてあったので、もしかすると男子をやるつもりなのか、検討くらいはするのかなと思っている。

問) 安全性についてはどうか。リスクはどうか。

答) 全く問題ない。

問) 子宮頸がんという女性の病気だと考える人が多いが、実は男性もHPVウイルスに感染する可能性がある。どのようにしたらよいか。

答) 中咽頭がんの件数は明らかにふえている。つくさんは声を失ったが、ああいう感じで男の人になる。防げるがんがあるなら防ぎたいと思う。

問) 先ほど「女性と男性は違う生き物」とおっしゃられて、共感しているところだが、昨今の時代において、先生のようにドクターであり、女性であり、議員であり、はっきり考えを言える人は少ない。女性活躍という話はよく聞くが、先ほどの月経や更年期について、男性である私は、発言がしにくいところがある。

そうした中で、先ほど先生がおっしゃっていた、「37歳くらいで限界」というところも含めて、政策展開していくために、誤解のないようにどのようなところに気をつけていけばいいのか教えていただきたい。

答) 私もよく批判される。ライフプランガイドという富山県の学校で使っている副教材に卵子の老化というようなことを書いたら、かなり批判された。でも、実際に外来診療の際に話をすると、皆さん悩みながら、「今年産みたいと思っているけれど、産もうと思ったらパートナーが転勤になった」といった話が多いので「そんなことを言っているようではダメだ」ということを言いたかっただけである。

私も言われるぐらいなので、議員が直接言うといろいろ言われる可能性は当然ある。なので、誰かに言ってもらえばいいと思う。科学的な根拠を持っている医師、あるいは保健師、あるいはインフルエンサーと言われるような女性たちがいる。その中に同じような考え方を持つ人がいれば、そういう人たちを前に出して、政策をつくっていかれたらどうかと思う。

問) 打ち損ねた9価ワクチンを待っていた娘を持つ私も、一人の親として「HPVワクチンの接種勧奨をどのようにやっていくのか。また、男性にも接種勧奨をしてほしい」と今年の議会で質問をした。

ただ、県の立場としては「市町村の事務である」とスルーされる形となった。

そうは言っても、今日もいろいろな話を聞いたが、この年代になる前の段階での認識が必要だという課題意識を持っていて、小学校・中学校ぐらいの義務教育段階でアプローチしていく必要があると思っている。学校現場、あるいは別の機会でも、学校の先生が、健康支援を含めて、こうした相談事業や支援があるという情報をしっかり伝えるなど、男性も女性も学ぶ機会をどのように創出していくべきか、その辺のアドバイスをいただきたい。

答) なかなか学校の先生がここまでやるのは難しい。ただでさえ忙しい学校の先生が、新たにこうしたものに取り組むことはなかなか難しい。ただ、体の基盤をつくるのは中学生ぐらいなので、小学校・中学校時代は大事で、私もやってほしいと思っている。いろいろな制約があるかもしれないが、プロフェッショナルを送り込むことも一つの手だと思う。

例えば、富山県の女性健康相談センターでは、講師派遣による授業も実施している。健康の教育については、プロに任せたほうが先生も学校も楽なので、最近では外部講師を活用する

ことも多い。

大事なことは、そこに予算をつけること、また、やる気のある学校だけがやって、やる気のない学校はやらないので、ひとつの制度にすることである。

富山市は、性教育について先進市で、全国で富山市だけだと思うが、教育委員会がお金を出して各学校に外部講師として産婦人科医を招いている。年に1回、2学年行くので2回、性教育を行っている。先生方は、産婦人科医の話に備えて、カリキュラム上の体の学習を前倒しして、年間計画を立てながら、校長先生や親も巻き込んで性教育に取り組んできた。制度になっているので、どこの学校でも全ての子供たちが受けられる。ここまでやって、性教育を仕組みにしているところは全国で富山市だけである。ほかは、性教育はずっと止まったままである。性教育と言っても、実際の中身は健康教育で、男性の健康、男性の射精について、きちんと学んだ男性は少ないと思う。

先ほど「妊活をしている方の中の半分は男性が原因だ」と言ったが、診察に来る中で、かなりの割合を占めるのが射精障害である。「膣の中に射精ができなくて子供ができない」と言って来られる方が圧倒的に多い。「刺激が強くないと射精ができなくなり、性交渉ができない」という方がとても多い。不妊治療以前の問題であり、そういう意味でもしっかりと教えて、啓発をしなければならない。

問) 貴重な答えをいただいた。参考にさせていただきたい。

行政にお聞きしたいが、健康相談センターの実績という表があったが、この件数に加え、年代別の件数も教えていただければ参考にしたい。もし、無理なら後で資料をいただきたい。

(後ほど資料をいただいた。)

問) この4年間、接種するよう説得をしてきたことで、ワクチン接種率が70%になったということだが、私も中学生と高校生の子を持つ親で、実際に家庭の中でも、まだ、妻と「自分の娘たちに打たせるべきかどうか」と悩んでいるレベルである。

私が住んでいる市では、11歳で令和4年度に接種した人は、対象者174人中2人という現状である。そうしたときに、やはり、親を説得することが大切だと思うが、その辺について、もう少しアドバイスをしていただけたらと思う。

答) 富山県は、最初は小児科の先生に力を借りた。小学校5年生のときに日本脳炎の2期目の接種があるので、そのときに「HPVワクチンの接種がもう1回残っているから2年後に来なさい」と言ってもらった。中学生は病気をしないので、普段なかなか小児科に行かない。日本脳炎の2期目の接種のときに「もう1個あるから中学校2年生になったら来なさいね」と言ってもらったことで、少しずつ打つ人がふえ、少しずつでいいからふえていくと、その中に、友達が打ったという人が1人出てきて「友達が打ったなら私も」という同調圧力がとても効く。富山県も接種率30%ぐらいのところから、「友達が打ったので私も来た」、そして、友達のお子さんが打ったと知ったお母さんが、「あそこの子供は打ったけれど何ともないみたいだね」とママ友に言う。広がっていくと安心する。

このように、最初は小児科の先生に力を借りるという方法もある。

問) 性教育の話が出たが、県内の医師と意見交換をした中で「性教育は幼児教育からやったほうがいい」という話も出た。幼児教育の中での性教育について、何か事例があれば教えてほしい。

答) なかなか富山県も、そこまではできていないが、まずは、自分の体のことを知ることである。

子供たちの性教育というと「子供に何をやり出すのか」みたいに皆さん思われる。そうではなくて、大体3歳、4歳ぐらいのときに必ず「お母さん、お父さん、私はどこから生まれたの」と聞かれる。ここで正しくと答えないと子供は二度と聞かない。「こういう話は聞いてはいけない」という認識ができてしまう。親からも教えにくくなる。小学校4年生ぐらいになると、周りから卑猥な情報しか入ってこない。だから、「命はどうしてできたのか」という素直なところで、聞いてはいけないものにしてしまうことの弊害がとても大きい。

つまり、家庭の中というのはとても大事で、例えば、「どこから生まれたの」と初めて聞かれたとき、どのように対応したらよいかを親に教える。まずはそこからだと思う。

富山市については制度があって、産婦人科医が中学校・小学校のPTAで講演をする機会が多い。このときに親御さんたちに「子供からこんなふうに聞かれたときは、どう答えるべきか」をお伝えして、それから「初めて月経を迎える年齢のときにはこう伝えればいい」とか、学校の授業ではないと思うが「小学校6年生ぐらいまでに家で何を伝えるべきか」を保護者に教えている。いいやり方だと思う。

ちなみに子供から「私、どこから生まれたの」と聞かれると、最初はドキッとすると思うが、そのときはまず、「何でそう思ったのか、何を知りたいのか、そっと聞いてください」といつも伝えている。そうすると、子供によっては「自分は本当にお母さんの子なのか」「お母さんの子だとは分かっているけれど、お父さんとどう関係があるのか聞いたかった」など、たったそれだけのことだったり、中には「具体的にどこから出てきたかを教えてほしい」という子もいるし、「自分はよく聞く帝王切開だったのか、そうではないのか知りたい」とか、そんな子もいる。「子供が知りたいことを伝えるだけでいい」とお母さんたちに教えるところからスタートしている。初めて聞かれた後に、そういうパイプができると、子供はまた聞いてくれるので、整ったら学校でもある程度のことではできると思っている。

問) ワクチンに関しては丁寧な説明と、説得させる力が重要であると感じたので、私も家族で話し合いをして接種の方向で進めたいと思っている。

また、「接種率を上げるためには集団接種が効果的である」という話も県内医師との話の中で出たが、コロナワクチンのように思い切った集団接種の方法が可能かどうか、その辺りを教えてほしい。

答) 「いつでも医療機関を開けているからおいで」みたいな、大がかりなものは無理だと思う。

そうではなくて、対象年齢を考えると、大学生であれば県外から来ている方、それから、県外に出ている方もいるので、「県外で打ったときにどうなるのか」「償還払いができるのか」とか、そういうことが問題となるが、効果的に集団接種を行うには、やはり大学である。キャンパスの中でキャンペーンをやりながら、医療機関に協力してもらってやることはあり得ると思う。

それから、富山県で、できれば考えてほしいと思っているのが、そうしたキャンペーンをやっているという雰囲気がとても大事なので、全ての医療機関で「何月何日はワクチン週間」みたいなものを設けて、そのときだけは、時間外や祝日も対応するようにする。これは、医療機関も費用負担ゼロでやるわけにはいかず、職員を確保しなければならないので、結構お金がかかる話なので、そこに対して行政が予算をつけられたらよいと思う。

例えば、12月のクリスマス前後に1週間キャンペーン期間をつくって、メディアで報道されたりすれば、どこかの大学で、単発でやったとしても大きな波及効果が期待できると思う。



※富山県議会での視察の様子

## (2) 【とやま介護テクノロジー普及・推進センター 介護現場の生産性向上について】

問) 先ほど「北陸地域ではロボットのメーカーは少ない」とおっしゃっていたが、貸出しをしているロボットの数はどのくらいか。

また、腰痛の話が出たが、ロボットの貸出しは、特に腰痛のほうを重視されているのか。具体的にどのような相談が多いのか教えていただきたい。

答) ロボットは、厚生労働省のモデル事業に指定された関係で使用貸出しを行っている。お配りした「介護ロボットを試しに使ってみませんか？」という資料に、介護現場の方がお試しで使えるロボットの一覧が掲載されている。見守り・コミュニケーションに関する相談や使用貸出しの申込みが多い。次が移乗支援で、移乗支援の中ではアシストスーツ、リフトの相談が多い。

普段のセンターへの相談では、研修事業に力を入れている事業所もあるので、研修の内容や、「どういう方が受けられるのか」また、ロボットに関しては「使用貸出しを通して現場にどのようなロボットを導入するのがいいか」あるいは、補助事業を富山県が行っている関係で、補助金の申請に係る相談なども多い状況である。

問) 富山県は、令和7年度に必要な介護人材2万1,060人に対して1万9,060人で、

2,000人足りないとのことであるが、実際、このロボットを使うことによって、2,000人の不足をどのくらいカバーできるのか。目標値があれば教えていただきたい。

答) 県で出しているかもしれないが、将来的にどのような予測を立てて、何人減らせるかという数字は承知していない。

現場からの話では、例えば、見守りセンサー系のロボット、ベッドの下でバイタルチェックができるようなロボットや、ベッドから立ち上がった場合、立ち上がったことをパソコンやタブレットで教えてくれるロボットを導入することによって、夜勤の職員数を1名減らすことができたという報告は受けている。

問) ロボットに対しての安心感はどうか。例えば、介護を受ける高齢者の方の中には少し不安に感じるといった意見はあるのか。

答) 実際に、現場でロボットやリフトなどを導入しようとするとき「利用者が怖がるのではないか」という意見もあったりして、ちゅうちょされたりするが、家族の方を招いた文化祭などの機会にリフトの体験などをして、ハードルを少し下げ「リフトってこんなにいいものなんだ」と感じてもらう。

また、怖がる人もいるが、利用者同士で、「これ楽だよね」という言葉を聞くことによって、ハードルが下がって「私も使ってみよう」という方もいると聞いている。

問) ロボットを操作する人材は、何か特殊な免許や講習が必要なのか。

答) 必要ない。

ただ、正しく使わないと適切なケアができないので、このセンターで研修をしている。

また、施設によっては、施設の中で研修のようなものを設けて「このリフトやロボットは、ここまでの水準に達しないと使わせない」という基準を設けているところはある。

問) 介護ロボットのお試し貸出しについて、大体どれぐらいの方が使っているのか。貸出しの件数は多いのか。

答) 毎月、相当数の相談を受けていて、石川県と福井県と岐阜県も網羅しているので、かなり多い。

問) 今、どんどんふえてきていて「補助金を申請する前に試してみたい」というところもある。

答) 実際に導入するときは何十万円もお金がかかるので、まずは使用貸出しを使って試して、よければ補助金を使って導入するという形で相談をいただくことが多い。

今、手元で件数は把握していない。

問) 例えば、移乗支援のHALとかマッスルスーツなどがあるが、職員が実際に使うのは結構大変で、もっと積極的に使えば慣れてくるかもしれないが、装着を手間を感じることもあると聞く。装着して使い始めればよいかもわからないが、時間や手間がかかるから、人によって

は、そういったものを使わずに自分でやってしまうことが多いと聞く。その辺に対して、どのように感じているか。

また、見守り・コミュニケーションの介護ロボットが多いと思うが、どのような種類のものを皆さんは試しているのか。

答) 委員がおっしゃるとおりで、生産性がどのように向上していくかというデータがよく示されるが、導入当初は使い方を覚えなければならないし、一旦は今までやっていたケアから離れ、ロボットを使ったケアに変えるので、ケアのやり方が変わることによって生産性は落ちる。

ただ、一旦は落ちるが、職場全体でロボットの使い方に取り組み、慣れていくことで効率性・生産性が上がって、またV字回復になる。最初に、使い勝手が悪くてもすぐに諦めるのではなく、しばらく試してみることが大事で、使い方を共有して、操作方法をしっかりと覚えて、職場全体で取り組んでいくことが必要だと思う。

見守り・コミュニケーションロボットでは、センサー系、特に多いのは、a a m s (アームス)と言われるもの、眠りスキャンと言われるもの、ベッドのマットレスの下に敷いてバイタルチェックをするもので、富山県でも非常に導入が多い。パンフレットのDの21、バイオシルバーさんの「a a m s . 介護」、眠りスキャンというロボットは、a a m s と同じようなロボットで、マットレスの下に敷くような形のものであるが、全床導入して、夜勤の職員を減らす取り組みをしているところが多い。



※とやま介護テクノロジー普及・推進センターでの視察の様子

### (3) 【ミミミラボ 子供たちがテクノロジーを楽しめる環境づくりについて】

問) 不登校の子の割合は何割ぐらいか。

答) 大体ひと月当たりの利用者数が、実人数でいくと100人を超えるぐらいで、そのうちの10人ほどだと思うので、1割ぐらい。中には、自分から「不登校だ」と言ってくる子もいるが、「少し足を突っ込みかけている」という報告を聞くこともある。



問) もともと、どのような形で始まったのか。三谷産業からの投資で始まったのか。みんなのコードさんからやりたいと言ったのか。構想はあっても、なかなかここまでの形にできないと思うので、どういう経緯なのか。

答) まず、三谷産業のほうで「何か地域に貢献できるものはないか」ということがベースにあり、模索している中で、三谷産業の社長と、みんなコードの代表の利根川が大学のときの友人だったということで、三谷産業は地元の大きな企業なので、スポーツ団体を持つことも可能だし、チームを持つことも絵画を買うことも可能だったが、「人材育成」、特に「子供たちに」という思いがあって、たまたまタイミングが合った。

すぐに加賀市にある、みんなのコードの施設を見に行って「これだったらやりたい」ということで、一気に話が進んだ。おっしゃるとおり、なかなか普通の企業だと進まないことが多いが、ミミミラボの場合は、三谷産業の社長の強い意思が一気にオープンに行き着いた。

問) 先ほど「アナログの部分をあえて導入した」とおっしゃった。私の子供もプログラミングが好きで授業を受けているが、「そもそも、字を書く前にタイピングを覚える必要性があるのか」と疑問に思うこともある。字を手で書くというアナログな行為も大事だという中で、人間の成長にどのような影響を与えるのか、こうした活動を通じて何か気がついたことがあるか。その辺の所感を教えてもらいたい。

答) 10歳までは、脳の思考的にも論理的な思考のプログラミングはまだ早い状況で、10歳までは、触って、何かして、「これだ、こんな感じなんだ」という直感的な驚きがあるほうが脳にとっては良かったりする。プログラミングという部分でいくと、10歳以降から、10歳でもまだ早いかなというぐらいで、それまでの間に、いかにアナログ的なところを経験しているかが大きな差になってくると思う。子供たちと作品を作っていく中で感じることは、遊んでいる子と遊んでいない子、いろいろなものを見聞きしている子と見聞きしていない子では、出てくる発想が全然違う。

逆に言うと、プログラミングには正解がある。でも、本来、正解がないものをたくさん体験しておくことが大事で、10歳までに正解ばかりを求めているとしたら、逆に、10歳以降は、正解がないものを考えられない傾向があったりする。「何が正解か」を聞きに来る子供は、下手したら6割近くいるかもしれない。それ以外の子供たちは、自由に発想する。私が以前、ロボットプログラミングの教室長やマネージャーをやっていたときは、幼稚園くらいの子から教えていたが、そのときの差は大きいと思う。

また、タイピングに関しては、確かに早いうちからできるほうが良いと思うが、これは、この1年で分かったことであるが、マインクラフトをパソコンでするようになってから、子供たちのタイピングの速さが向上した。マインクラフトでプログラミングをしなければならぬメイクコードがあるが、自分がやりたいものをユーチューブ上で見て、それを再現するために、自分でタイピングしなければならない状態になると、ほとんどの子のキータッチがすごく速くなっている。

逆に、ニンテンドースイッチをやっている子は、キータッチが全然できなかつたりする。

私は、もともとマインクラフトなどのゲーム系を推奨していなかったが、ミミミラボに来

て、特にこの1年間、マインクラフトの指導をしながら変化を見てきたが、間違いなく向上している。だから、保護者には「スイッチをやめて、パソコンのほうが絶対いい」と伝えている。きれいなタイピングの仕方は、ある程度は訓練したほうがいいと思うが、そんなに早くなくても、中学校からでも大丈夫だと思う。

問) 今後、こうした施設をもう少しふやしていくという考えはあるか。

答) 同様の施設が、明日、9月1日、北海道の釧路でオープンする。これは、地元の団体が開設するが、その開設支援をみんなのコードがしている。

それから、休眠預金を活用した事業で、北海道から鹿児島県の奄美まで、6つの団体が今後、半年ぐらいの間に開設を予定している。

そのほか、ミミミラボのように、みんなのコードで直接運営をさせていただく話も来春に向けて進んでいるので、1年以内に、大体10拠点ぐらいは開設する。

問) 私も、eスポーツなどもいいなと思うので、普及させていきたいと思う一方で、子供たちが1年中ゲームばかりしていることはないと思うが、こうした事業を最初に導入する場合、批判的な社会の声もあると思う。

今、デジタルを活用していかなければならない時代で、10代、20代の人たちが、デジタルを普通に使う社会になっていくとすると、そうした批判的な声に、こうした事業活動で答えを出してくださっているが、その辺について考えを聞きたい。

答) 「批判的・懐疑的な声にどう答えていくか」ということであるが、「ゲームをする」ということに対する取扱い、同時に「ゲームを作る」ということも含めて、実験的に話したり、検討をする中で、私たちの場合は「居場所」としての機能を持ち合わせているので、その「入り口」あるいは、その「きっかけ」としている。「依存すること」とは種別が違う。

学ばなければならないという形になると、急につまらなく感じる。勉強もそうしたところがあると思う。「マインクラフトをやっている子供たちのタイピングが上達した」という話は、まさに遊びの延長線上であって、子供たちにとって「勉強をしている」「学んでいる」あるいは「スキルを身につけている」という感覚はない。遊んでいる、楽しんでいるうちに、いつの間にかスキルが身につく。ただ、ゲームを楽しんでいるのではなく、入り口、きっかけとしてゲームがあるというだけで、私たちが、その先につながる形に導けるような仕組み、環境を整えていけたらいい。

答) 環境の部分で、ほかのデジタル施設にはない一つの特徴として、例えば、ロボットプログラミングの大会に出ている子供たちの1日の練習の仕方は、1時間やって2時間休憩する。下にクッションがあって、ザッとやった後、そのままパターンとクッションに倒れる。物事を考えるとき、机の上ではなく、クッションの上でゆったりしながら考えてひらめくことがあると思うが、そうした環境にミミミラボはなっている。通常の教室では、パソコンがずっと並んでいて、それしか考えられない環境になっているが、ここは、遊びの延長、ゆとりの延長みたいになっているので、いい環境になっていると思う。

問) (施設を見渡しながら) マインクラフトは、何か締切りなのか。

答) ずっと遊んでいたが、最後の夏休みの宿題で、全国大会の提出が今日までである。  
マインクラフトに関しては、ああ見えて実は、いろいろコミュニケーションを取りながらやっている。ゲーム依存とは違っている。実は今、上の階でやらせているのは、下でやらせていたらうるさすぎるため、それぐらいコミュニケーションも活発にしている。

問) 子供だけでなく大人にとっても面白い取り組みなのかなと思います、勉強させていただいた。運営面のことでお聞きしたいが、スタッフ、コーディネーター、メンターはどれくらいいるのか。

答) メンターは大学生のメンターになるが、今、登録しているのは10人ぐらいである。コーディネーターは、副館長と私である。

問) 先ほどの説明では「施設のハード面は三谷産業、機材はアイ・オー・データ」ということだったが、そうした皆さんの活動には、行政的な資金が入っているのか。先ほど「休眠預金を活用している」という話もあったが、どのようになっているのか。

答) ミミミラボの場合は、基本的には全て三谷産業からの出資で、私たちの給料に関しては、みんなのコードから支払われる形になっている。基本は、三谷産業が全てバックアップしてくれている状況である。

答) 三谷産業のCSRの予算からいただいているので、この場所の提供、運営資金全額、三谷産業に出してもらっている。

問) 同じような施設を1年以内に全国に10拠点、新たに展開できるノウハウをどのように持続しているのか。ここは三谷産業のバックアップがあるが、ほかのところは違うと思うがどうか。

答) 一つ一つの現状が違っているが、まず、加賀市については、開設に関する費用は、ガバメントクラウドファンディングで1,100万円ぐらい集めることができた。もちろん、物件自体は、先ほど説明したとおり加賀市の建物なので、大きな工事費は発生していない。主に、機材の購入である。大体、1拠点当たり2,000万円程度と考えていただければと思う。

予算については、自治体の財源や、加賀市については、地域おこし協力隊の隊員2名をスタッフとしている。高知県の須崎市でも地域おこし協力隊の制度を利用している。須崎市に関しては、日本財団の「子ども第三の居場所事業」という助成で、開設費として初期費用を上限5,000万円、100%出してもらえるので、自治体の持ち出しはゼロである。年間の運営費が720万円なので、日本財団で720万円、須崎市で1,100万円となっている。

問) ミミミラボの利用料は無料であるが、ほかのところも無料なのか。

答) 無料である。

問) ロボット大会をたまにテレビで見るが、石川県、富山県、四国のチームが強い。みんなのコードが運営している、こうした拠点との関連性・地域性はあるのか。

答) 地域性はあるかと思う。拠点ごとの差もあって、みんなのコードが運営している3拠点は、館長、副館長、スタッフに関して、何かのスペシャリストであることが多い。私は以前、ロボットプログラミングを教えていたが、アーティストであったり、元先生であったり、いろいろな特徴を持っているので、館ごとに特色がある。

加えて、子供たちがロボット大会に出られるか出られないかのところでいくと、基本的に私たちは外に対して何か結果を出すということはしていない。しかし、学校教育や塾の縦割りの、時間割的な要素とは違うので、小さいころに、塾も何もないときに、自分の好きなことだけをずっと研究しているような雰囲気が、今のハ部の拠点の中にはあるので、とことん納得がいくまで追求できるところが、最終的に結果になって現れてきているのかなと思う。意外に、他にはないつくりになっていると思っている。

問) 最近の不登校の子供は、インプットでいろいろやることに関して強い子がいる。求められている人材が不登校の子の中にたくさんいるかもしれない。そういう掘り出しをするという意味でも、大変重要であると感じた。

山梨県にも、こうした施設に来てもらえればと思うが、その辺の考えを教えてください。

答) 最近の不登校の子には、いろいろなタイプがいて、ポジティブな不登校の子が多い。「今の学校は嫌だから自分には合わない」と自分で判断している子が多くて、不登校になっている子は、意外と、自分の考えをはっきりさせている。その子たちの、どのような得意な分野を伸ばせるか、私たちは日々見ている。ギフテッド的な子も多くて、ギフテッドの子は、そのときギフテッドでも、そこからスキルを高めていかないと、10年後には、全然伸びていなかったりする。そうした部分を踏まえながら、できる限り寄り添えたらと思っている。昔の不登校のイメージとは異なっている。

この前、学校の先生に「お前、学校に来ないでどこに行っているんだ。家にずっといるのか」と聞かれた子が、「ミミミラボに行っている」と答えたと耳にして、そういう答え方もあるんだなと、本当にポジティブだなと感じている。そこを今、試行錯誤している。

答) 出席認定をするかも考えの一つとしてはあるが、例えば、総合型を選択して、学校外でのいろいろな取り組みを含めて、こうしたところで好きなことを極めた子たちが、結構いいところの大学に入学するケースがある。

自治体によっては、例えば、ものづくり産業のまちであれば「ものづくり人材を育成したい」ということで、施設の開設を検討する、あるいは「新たな産業を生み出したい」「企業家を育てたい」という、IT企業家育成の施設の開設を考えているなど、その土地の課題に合わせた施設を設計することがよいと思う。



※ミミラボでの視察の様子



#### (4) 【石川県立図書館 これからの県立図書館の在り方について】

問) スペースの予約は全てオンラインでできるのか。

答) 館内にある機器で、空いていれば当日来て予約することもできるし、石川県立図書館のホームページに石川県の施設の予約システムが組み込まれているので、自宅から、そのホームページを通じて予約することも可能である。

ただ、全部をホームページで早い者順で予約されてしまうと、来館した方が使えない可能性があるため、ホームページでの予約を半分、あとの半分は実際に来て予約する形としている。

問) 蔵書をデータ化し、オンライン上で貸し出すことはされているのか。

例えば、図書館に来なくても、本をデジタル化してオンライン上で見たり、貸し出したりすることはされているのか。

答) 電子書籍については、現段階では導入していない。図書館としてデジタルは進めていかなければならないと思うが「せっかくデジタルでサービスを展開するならば、石川県独自のコンテンツを提供していこう」ということで、先ほど話したシステムを使うと、昔の輪島塗などの工芸デザインを著作権フリーで使うことができる。石川県独自の写真やデザインなどの地域資源のデジタル化はどんどん進めている。

一方、一般的な本と同じコンテンツのものに関する電子書籍については、コロナで来られなくて大変だった時期に検討したことがあるが、今のところ、市・町の図書館にお願いをして、県立としては「ある程度難しい本を置いておこう」という方向で予算を振り分け、蔵書を構築している。電子書籍は図書館の財産にならないが、蔵書は、痛まない限りは財産として未来永劫残るので、今は、生まれたての図書館として、むしろそちらのほうに予算をかけている。

問) 平成29年に基本構想を策定し、令和4年7月に開館したとのことだが、総工事費や財源の部分を教えてほしい。

答) まず、建物建設に120億円、緑地整備、400台の駐車場の確保、ICタグを使ったシステムなどの外構工事やシステム整備などの建物以外に30億円、合わせて150億円の予算を使わせていただいている。

金沢大学工学部が小立野から角間に平成17年に移転したが、小立野地域は、昔、戸屋山から金沢城を築くための石を運んできたことから、石引町という名前が残っているぐらいの由緒ある地域である。由緒ある地域が寂れていく。商店街がだんだん少なくなっていく。活性化しなければならないというときに、県庁が海側に移転し、中心市街地活性化ということで、旧庁舎を利用した、しいのき迎賓館と、21世紀美術館をつくった。同じように、この地域に、県は県立図書館、市は金沢美術工芸大学をつくった。これは、まちづくりの一環ということで、国土交通省の補助金が入っている。

あとは、できるだけ交付税措置の有利な起債を組み合わせ、大まかに言うと、そのような財源構成である。

問) 今までの図書館ではあり得ない、垣根を越えて、飲食ができたり、会話ができたりすることで、逆に、その部分で何かクレームやトラブルが起きた事例はあるか。

答) たくさんある。「昔ながらの図書館がいい」とおっしゃる方は「うるさい」と言うし、まして、子供が悲鳴あげるぐらいの遊び場になっている。野放しにはできないので、たまに「静かにしてください」と放送をかける。でも「おしゃべりしていいと言っている施設として、静かにはないだろう」と批判され、両方のクレームが来る。

あとは、文化交流エリアでは食べ物はオーケーで、さすがに閲覧エリアは本が汚れるので食べ物NG、蓋つきの飲み物はオーケーという形にしている。ところが、閲覧エリアにこっそりとお菓子をもち込む人がいるので、見回りをして注意をしなければならない。両極端の批判があって、評価と批判が正反対である。

でも、今の取り組みをやめるかという、こういう方針で造った建物で、喜んでいても多い。例えば、今までは騒いではいけないので、子供を図書館に連れて行けなかった。あるいは、障害があるお子さんは奇声を上げるから図書館に一步も足を踏み入れられなかった。そういう方が喜んで来る。あるいは、ベビーカーの子供がいるお母様方は、絶対にコンサート会場に行けなかった。ところが、だんだん広場で月1回は30分無料のコンサートを行うので喜んで来る。

それで、お子様をベビーカーに少し退避させれば、その場で音楽も聴ける。「こういうところは本当にありがたい」「子供も一緒にその場の雰囲気が味わえる」という評価があるとすれば、逆戻りする必要はないと思っている。

問) 運営は全館直営なのか、カフェはおまめ舎さんとなっているが、委託が入っているところはあるのか。

答) カフェについては、プロポーザルを行い、この図書館のコンセプトに合う民間の会社に入

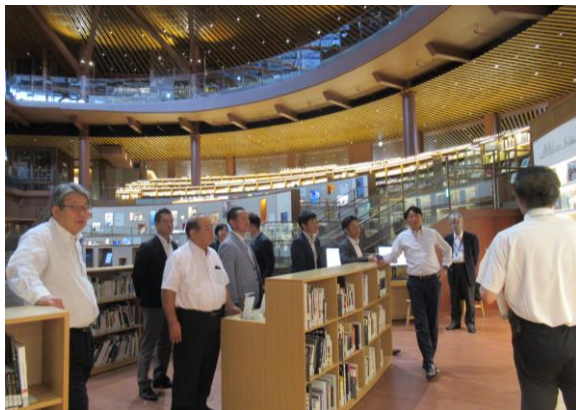
っていただいた。基本的にカフェ以外は直営である。

しかし、本多町の図書館のときより、蔵書も面積も3倍となっている中、総務部人事当局がつけた定数は1倍だった。運営できるわけがない。せめて、民間の力を導入しようということで、1階・2階にあるカウンター業務は図書館流通センターに委託し、あとはICT機器を使って、借りるのも返すのも利用者一人ですべてできるシステムを作って、3倍ほしいところを1倍の定数で我慢して、あとは委託1倍、ICT1倍で賄っている状況である。

問) 公文書館機能を付けたということだが、山梨県にはまだ公文書館はひとつもない。公文書館機能をこれからどのようにしていくのか。また、アーキビスト、公文書館法で定める職員の配置もされているのか。

答) まず、県議会の議論の中で、公文書館を独立させて造るべきだという議論もあった。ただ、この地で、公文書館を単独で造っても、どれだけの利用があるのかということで、むしろ、図書館の機能として公文書館機能を入れた。図書館条例は公文書館法を引用している。図書館法、公文書館法を引用しながら、公文書館機能を図書館の機能として、令和3年度までは永年保存としていたが、国の公文書館法と一緒に30年の期限を設けて、いらぬものは廃棄、必要なものとして手元に保管すべきものは引き続き延長する。手元に保管する必要はないが、廃棄できないものは、歴史公文書として、この図書館の地下書庫に移管をしている。

アーキビストは、研修でどんどん取らせるようにしている。いわゆる文書のアーキビストとデジタルアーキビスト、どちらも取るように、今、一生懸命研究をしてもらっている。



※石川県立図書館での視察の様子